

ホーランエンヤの見どころ

うた唄

ホーランエンヤは「豊来栄弥」「宝来遠弥」とも書かれ、豊作への人々の熱い願いが込められています。この唄は、櫂を漕ぐときに調子を合わせるために唄われる船唄で、五大地それぞれに独自の調子を持ち、独自の節回しで唄っています。

「ホーオオエンヤ ホーランエーエ ヨヤサノサ エーララノランラ」と、耳に残る心地よいひびきです。場面に応じて唄を替え調子を整えますが、7つの唄を使い分ける地区もあります。



剣権

踊り

剣権と采振りと太鼓による踊りは櫂伝馬踊りといい、江戸時代末期、加賀村の漁村の船頭が越後地方（新潟県）で習い覚え、その後ホーランエンヤに取り入れられました。当時は大変人気だったといえます。若者が勇壮な剣権、女姿の采振りのすがたになって踊りを披露し、美しいすがたが人々を魅了します。踊りは唄と同様に五大地で少しずつ違ってきます。



太鼓

采振り

衣装

剣権の腰のしめ縄は、相撲の横綱を模したものとされています。しめ縄の下の前掛も相撲の化粧まわしをまねたもので、華麗な刺繍がほどこされています。女性のすがたの采振りや太鼓の衣装は、長じゅばんを着た上から、友禅などの着物を着ます。太鼓はかわいい花笠や帽子をかぶります。

船



船はもともと松江城内堀の北惣門橋あたりから漕ぎだしていましたが、堀川の水深が浅くなり船も大きくなったので、今では大橋川の川ばたから船出しています。神様の乗った神輿船や、神輿船にお供しお守りする櫂伝馬船など約100隻が連なり、延々1kmにおよぶ大船団となって進んでいきます。

船の飾りつけは、まばゆい色彩で祭りに花を添えます。

松江 ホーランエンヤ 伝承館

ホーランエンヤとは？



ホーランエンヤは、正式には「松江城山稲荷神社式年神幸祭」と言い、松江城内にある城山稲荷神社の御神霊（神様）を約10km離れた東出雲町の阿太加夜神社まで船でお運びし、7日間にわたり出雲国内の安定や豊作をお祈りし還ってくる船神事です。

10年に一度、大橋川と意宇川を舞台に約100隻の船によって大船行列がくり広げられ、松江が誇る全国でも最大級の船神事です。

ホーランエンヤは、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社まで船でお運びする渡御祭と、阿太加夜神社における7日間の大祈禱とその中日の中日祭、阿太加夜神社に安置された御神霊を、再び城山稲荷神社に船でお送りする還御祭で構成されています。

ホーランエンヤのはじまり

1648年、出雲国は大凶作の危機に見舞われました。これに心を痛めた松江松平家初代藩主・松平直政は、城山稲荷神社の神職を兼務していた阿太加夜神社の神主のもとへ城山稲荷神社の御神霊を船でお運びし、長期にわたって豊作を祈らせました。これがホーランエンヤのはじまりです。豊作の祈りは見事に叶い、以後370年もの間、ホーランエンヤは脈々と守り受け継がれています。



松平直政の肖像画



城山稲荷神社のようす

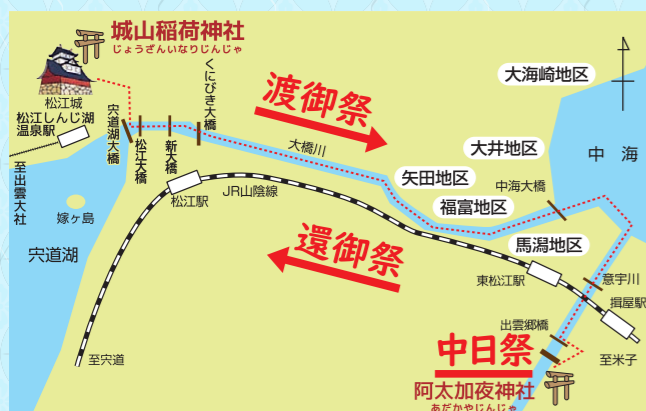


ごだいち ホーランエンヤの五大地

五大地とは、馬潟、矢田、大井、福富、大海崎の5つの地区のことを言います。1808年の神事の際、風雨が激しくなり神様の乗った船が危険な状態になったのを、馬潟村の漁師が救い阿太加夜神社まで無事送り届けたのがきっかけで、以後權伝馬船が神様の乗った船にお供しています。馬潟につづいて各地区が参加するようになりました。

五大地では、神様を無事にお届けすることを最大の使命とし、町内住民全員で力を合わせ、祭に取り組んでいます。

一番船 馬潟



二番船 矢田



三番船 大井



四番船 福富



五番船 大海崎



權伝馬船と乗組員

權伝馬船は、神様の乗った船をお供しお守りする役目をします。乗組員はそれぞれの地区の男性がなり、ホーランエンヤの唄や、剣權と采振りと太鼓による權伝馬踊りは、先輩（師匠）が指導し伝統が受け継がれていきます。

「ホーランエンヤ」の呼び名の由来は、權伝馬船の漕ぎ手の掛け合いの音頭といわれています。



でんまちょう
伝馬長

伝馬頭取とも呼ばれ、權伝馬船のすべてを取り仕切る船長です。常に船の中央にでんと構えて、船員たちに適切な指示を出します。船の安全とスムーズな運行を第一に、船全体を統率します。



おんどと
音頭取り

權方が漕ぐリズムを合わせるのに重要な音頭を取ります。目立つ衣装に胸を張って、両手を腰にあて堂々と腹の底からホーランエンヤの音頭を取ります。踊り子と權方のリズムが一体となりますように調子を合わせます。



はやすけ
早助

水先案内とも呼ばれ、長い棹をたくみに操り、他の船との接触を回避するなど、權伝馬船がスムーズに運行するにはたります。船の最先端に陣取るため一番目立ち、地区ごとに独自の衣装でアピールします。



ねりかい
練權

地区により艦權とも呼ばれ、權伝馬船の舵をとりまします。ひときわ目を引く巨大な權を両手に抱え、全身全霊で、伝馬長の指示に従い正確に權伝馬船をコントロールします。唄で出航と帰航の合図をします。



けんがい
剣權

船の先に陣取り、剣をかたどった長さ1mほどの權、その名も剣權を自由自在に操り勇壮に踊ります。古くから人々のあこがれであった歌舞伎役者や力士をイメージした格好をしています。



ざいふ
采振り

色鮮やかな着物に身を包んだ女姿の花形役者です。采と呼ばれる竹の棒を両手に持ち踊ります。船の後ろにのせた樽の上に立ち、限界まで体を反らせ、天空めがけて華麗に采を振ります。



たいこ
太鼓

色鮮やかな衣装を着て、頭には花笠や烏帽子をかぶり、唄にあわせて太鼓を打ち鳴らします。主に小学生が演じます。姿勢よく正座し真剣なまなごしでリズムをとります。



かいかた
權方

權伝馬船を漕ぐ人たちです。乗組員の3分の2近くを占めます。鮮やかに染め抜いた襟付きのはっぴ姿に鉢巻を締めホーランエンヤの掛声とともに力の限り權を漕ぎます。